

同志社大学通信

# One PURPOSE

No.116

1998 OCTOBER

DOSHISHA UNIVERSITY

座談会/  
大学におけるスポーツの意義を問う  
同志社人訪問/  
悲願のワールドカップ出場を終えて！



FOR BETTER COMMUNICATION



2

## 座談会 大学におけるスポーツの意義を問う

7

「同志社の熱い」夏のプログラム」  
私の体験レポート

10

留学生の眼 和田拓之さん  
中国返還後の香港に見る濃密なる多民族社会

11

ゼミ・ゼミおじやまします 法学部法律学科・森田章ゼミ  
就職活動で垣間見た日本企業の現実  
岐路に立つ日本型経営

13

同志社人訪問 小島伸幸さん  
悲願のワールドカップ出場を終えて！

16

CAMPUS NEWS

19

1997年度 大学決算について

21

先生の推薦する BOOK&VIDEO

23

新シリーズ  
わたしと「仕事」

26

ワンパーパスコメントリー

## COVER STORY

表紙の人



表紙の人は、工学部4年次生の北尾<sup>きたおし</sup> 怜士さん。小学生の頃より始めた水泳、高校時代にうち込んだ陸上競技を下地にトライアスロンクラブに入部。苛酷なスポーツかと思いきや、北尾さんは「水泳に陸上、それに自転車と、好きなスポーツを3種目同時に楽しめる欲ばりな競技」という。昨年には堂々、日本トライアスロン学生選手権に優勝。今夏は、日本学生チャンピオンの勲章を引っさげて、ドイツのキール大学で開かれた世界大学トライアスロン選手権に参加した。結果は48位とふるわなかったものの、「世界のレベルを知るうえでは貴重な体験ができた」と語る。世界の舞台に立つために、もう1年学生生活を続けることになったが、目標は大きく、トライアスロンが正式種目になる2年後のシドニーオリンピックを目指して欲しい。

# 大学における スポーツの 意義を問う

座談会



大学になぜ体育の授業があるのでしょうか？そんな疑問を持つ学生諸君もいると思う。今回は、スポーツとさまざまな係わりを持つ人々に集まっていただき、大学生にとっての体育・スポーツの意義について語り合ってもらった。

**大学でなぜスポーツをするの？**

**竹田** 今日、集ってもらった皆さんは、立場こそ違え、なんらかの形で大学スポーツに係わりを持つ人たちです。それぞれの立場から、スポーツはどんな意味を持つのか聞かせてください。

**野里** 僕は陸上部でやり投げをしています。中学校から陸上部に所属。その頃は砲丸、幅跳び、四メートル走といく三種競技をしていました。成績もそここのものが残せたので高校に入っても続けました。ただインターハイ



では、思うような記録が残せなかった。だから大学に入っても、自分の可能性に挑戦を続けていきます。

**門井** 陸上部は、大学院生でも出場できるんですか？

**野里** 陸上部の場合、大学院生でもOKで、学連登録は八年できるんです。

**高濱** 僕の場合、サッカーをやっていたんですけど、高校に入つてすぐ、怪我を繰り返してしまいました。それでスポーツはやめたけど、卒業する時に、高校時代何もしてこなかったなあとすごく寂しくなった。大学に入ったら何かやるつもりで、別にスポーツにはこだわって



なかつたけど、クロスというスポーツを始めました。ところが一年生の秋、また腰をいためてしまった。みんなが一番伸びる時期なんで、悔しい思いをしたけど、ここでやめたら高校時代と同じことを繰り返す。だからここは踏ん張りたくて頑張ってきました。

近藤 あせりますよね、そんな時って。

竹田 あれは高瀬君が三年生の時かな。トレーニングについてよく質問に来てたよなあ。

高濱 うちのクラブは、組織が未熟だった。全国大会に出ろつという目標を持ってやってきたけど、もう一步のところで止まってしまう。それで一昨年組織をもう一度考え直さうということになり、学生トレーナーもその時につくった。昨年、僕がリーダーになった時に竹田先生にいろいろ教えてもらったんです。

竹田 電子メールで毎日のように質問してくる。しかも細かい字でびっしり書かれているわけ。(二回笑)

近藤 学生トレーナーというシステムを導入して、戦線に現れましたか？

高濱 一応結果は出せたけど、それがトレーナー導入の結果かどうかは明言できない。ただそれまで全国大会に出られなかったチームが、二年連続で全国大会に出場できて、今年は日本一を目指そうという意識まで芽生えてきた。何よりフィジカルトレーニングっていうのはとてもきつい。それを酷暑の中や雨の中で続けていた。結果的にそれに耐えることによって、養われた精神力が最後になって効いてくる。陸上部は得意ですよ。そういうのって。

野里 フィジカルトレーニングは確かに効果があるけど、身体に負荷がかかるだけに「気をつけないといけない」。とにかく安全性の面からも

ウオームアップ・クールダウンは必ずやること。そして練習後は疲労回復という意味からも、アイシングは効果がありますね。そういう点には、僕たちすごく神経質になっている。

高濱 陸上はとくに、身体が資本ですもんね。

近藤 そういう専門知識を持つ

ている人がクラブにいればいいでしょうけど。私はタッチフットボールをやってるんだけど、サークルだから、コーチが来てくたさるのは週一回だけ。専門的な人がぜんぜんいないんですよ。だから、本で得た知識とか、人から聞いた本当がウソかわからないものを信じてやっちゃうことが多いんです。

宇野 先生のご専門はスキーですが、トレーニングなど、やはり科学的な研究を行っておられるわけですか。

竹田 現在のスポーツ界は、スポーツ医学の知識・サポートがなければ、競技力の向上は期待できない時代です。スキーの場合には、運動生理学というのがかなり浸透してきています。スキーにクロスカントリーという種目があるんだけど、これは北欧がかなり強い。北欧は運動生理学の発祥の地で、北欧の選手はみんな生理学に基づいたトレーニングを積んで強くなっている。そういう情報が日本にもどんどん入ってきてるから、わりと理論に基づいた、根拠のあるトレーニングを積んでいる。それと栄養と休養面の管理と併せてね。その割に、世界と日本の差は大きいけどね。

近藤 その休養という面ですけど、チーム競



技って、ついつい無理をしちゃいますよね。私なんか肉離れしやすい体質なんで、一週間、二週間とかんと休んで、体を直してからやりたいんだけど、ポジション取られるのがいやだとか、試合に出られるか出られないかの瀬戸際だとかで、妙に頑張りがちちゃうんです。

野里 それが団体種目の特徴なんだよ。陸上の場合、休むのも練習のうちという意識が浸透している。

近藤 肉体的な面だけじゃなく、精神的にも楽になれるから、そういうとき休めたらなあって思っんですけど、それでも無理してやっちゃう自分がいて……。

竹田 それは、はっきり言って休んだほうがいいんだよ。そういうことがきっちりできる選手が強くなる。競技力を高めるためには、こつこつ自己管理ができる知識が必要なんです。

## 同志社における保健体育の授業

竹田 宇野さんは学部生の頃の三年間、連続してスキーの課外講習に参加しているけど……。

宇野 一年生の時から、課外講習でスキーの授業に参加させてもらいました。保健体育の授業で先生がスキーに行こうと声を掛けてくださった。野沢温泉スキー場の講習に参加したのが最初でした。午前中は先生が教えてくださって、午後はフリータイム

近藤 どんな人が参加していたんですか？

宇野 まったくの初心者からかなり上級の人まで参加していました。最初の印象がよかったからなんでしょうか。三年連続で参加していました(笑)。雰囲気はすごく和気合い合いで、先輩はめちゃくちゃよって知り合いなんだけど、って程度の人もとても親しくなれました。同社社の保健体育の授業って、実は競技者としてすごく有能だったり、オリンピックに出場したような先方が実技指導や講義をしてくださっているわけで、そういう意味では本格的なスポーツを肌で感じられる環境にあるんだなあと思います。

竹田 課外スキー講習は、体育の先生方が皆さん頑張って値段交渉もして、非常に安価で開講しているんです。安くてスキーが上手くなれる、とても良い授業なんです。

同志社では保健体育の授業でスポーツ・体育に関するいろんな講義科目を幅広く提供しているんだけど、何か授業に関する意見などはありますか？

近藤 「リハビリテーション」という授業がありますよね。

竹田 障害者や怪我をした人のために開講している科目だね。

高濱 あれに参加させて欲しかったです。

竹田 リハビリの授業は何を勉強したいの？

高濱 怪我人が出たときのケアの仕方なんて、実技までは教わらないじゃないですか。

近藤 それは私も思ったんです。でも、シラバスを読むと参加資格が書いてあって、じゃあ無理だなあってなっちゃた。

竹田 スポーツ特講っていう授業があって、スポーツ整形外科のようなものを取り入れてい

る先生もおられるよ。それにスポーツセミナー

という授業もあるけど、皆スポーツ種目を実技と理論で深く掘り下げていて面白いと思っ

高濱 「スポーツ運動学」という授業も面白かったですね。僕は、この授業で海外の選手がどんなトレーニングをしているのか、いくつかの事例を調べてレポートしたわけですが、そうじゃなくても、たとえばNBAに関心を持つ人はバスケットボール選手の年俸を調べてきてもかまわない。つまり、スポーツに関することなら何でもいから、海外の事例を自分で選んできて、それについて学ぶんです。インターネッ

トがやはり始めた頃で、パソコンの使い方も学べたし、海外の事例もそうやって利用できるんだって分かって面白かった。

宇野 大学でスポーツをやっていたいことの一つは、学部を越えて友達になれること。体育の授業は課外講習をはじめ、人とふれあう機会が生まれるように思います。

門井 確かに、授業だと話しかけるにも変なてらいがあるけど、一所懸命スポーツした後だと自分がさらけ出せるような気になる。

近藤 スポーツって、心の壁がなんかとっぱらえるようなところがありますね。学年も関係なく素直にふれあえる良さみたいなものがあり、短い時間ですぐに仲良くなれるんですよね。

## 「スポーツを」「する」「観る」「伝える」

竹田 門井君、『アトム』の編集委員になろうと思ったきっかけは？

門井 僕は結構スポーツが好きでした。小学生時代は水泳とソフトボールをやり、中学



竹田 正樹  
【文学部助教】



宇野 綾子さん  
【課外講習参加生】  
アメリカ研究科 1年次生



近藤 悦代さん  
【タッチフットボール部】  
文学部 3年次生



高濱 宏樹さん  
【ラクロス部】  
法学部 4年次生



門井 聡さん  
【『スポーツ アトム』  
編集委員】  
文学部 3年次生



野里 高志さん  
【陸上部】  
工学部 4年次生



生でバスケットボールをやり、頑張ってきたんですけどなぜかレギュラーをとれなかった。スポーツは好きやけど、僕は根性なしやから体育会的な体質も好きになれなかった。それが高校一年生の時、テレビでバルセロナ・オリンピックの中継を見ていて、競技のほかに応援の人や会場整理の人などを紹介していて、あっこれや！スポーツにはこういう係わり方もあるんやっと思って思うようになりました。それで同志社に入学し、キャンパスで配っていた『アトム』を見て、「これしかない！と思って入部したわけです。」

**宇野** プレーする方じゃなく、伝える方を選んだわけですね。

**高濱** 去年からリウクロスも取材に来てもらえるようになったんですけど、『アトム』に載せてもらったりすると、すごくうれいですがね。

**宇野** でも今回のサッカーW杯の一連のスポーツ報道を見ると、取材される方もたいへんだなあと思ってしまいますね。

**門井** カズ選手の一連の報道にしても、城選手の一件にしても、過熱さみというカズスポーツ報道がワイドショー化していますね。本番に向けて日本代表がユーゴスラビアと最後の練習試合をしているのに、その報道はそっちのけで、代表をはずれたカズ選手の話題でもちきりになる。スポーツ報道の姿勢として僕はごうかと思えますね。

**竹田** スポーツっていろいろな係わり方がある。自分でやる人もいれば、観て楽しむ人もいる。競技録を収集する人もいる……というふうに、そこだけでも、最近体育会の試合なんか応援に行く人がすごく少ないでしょう？？？このことをみんなが思っています。

**宇野** だいたい『カレッジソング』歌える？って聞いても、ほとんどの人が歌えない。

**近藤** 私も歌えない。

**野里** 僕は、まずレベルだと思う。

**竹田** 強いと観に来てもらえん？

**高濱** そう思います。それから競技場ですね。僕らの試合でも、立派な競技場を使う時には観衆はけっこう多いですよ。環境が人を呼ぶという面は確かにあります。

**竹田** 『アトム』で宣伝はやってないの？

**門井** 試合スケジュールですか？掲載しているんですけどね、あまり見てくれないのかな？

以前、競技が始まる前に、さあ同志社チームをやろっぜ！って、選手が始めたら、応援に来てた人たちも校旗をうねらせていっしょになって同志社チームを始めました。なんかみんなやりたかったみたい。

**竹田** リーグやワールドカップサッカーの盛り上がりを見てもわかるように、やはりみんなやりたいんじゃないかな？

**宇野** 自分でやり始めるのは恥かしくて、だれかが始めると、みんなが一つになりますよね。

**近藤** 私なんか、サッカーはあまり詳しくないけど、あんな応援風景見ると、顔にワウってベインティングして応援したくなる。

**門井** 一回応援に行つて味をしめると、絶対に面白んだけどなあ。

## 一つのことを打ち込む、ということ

**高濱** 去年、京都大学のアメリカンフットボ

ール部が創部50周年で、ハーバード大学のアメリカンフットボールチームを招いたとき、京都大学の監督が「彼らのテクニクじやなく姿勢を学んで欲しい。アメリカンフットボールにける情熱も、学業にける情熱も彼らの方が数段上だ」というようなコメントを選手たちにして

いた。海外は環境も違うんだらうけど、学生自身の意識の持ち方が違う。なんでそんな気持ちになれるんでしょうか？

**野里** 目的意識の差じゃないだらうかと思うんです。なぜこのトレーニングが必要なのか、なぜいま僕は走っているのか、その辺の意識がしっかりして、先生から言われたからこの練習をしているというのとは大きな違いがある。極端にいえば、自分の人生の中でこのスポーツはどんな意味があるのかまで考えてやっている。

**竹田** 確かにそういう意味でレベルが高いね。みんなの場合には？

**近藤** 私は、スポーツをやっているから勉強できないぞって思われるのは悔しいから、余計に頑張ってしまうんです。でも、タッチフットボールをはじめて一年目くらいだったか、もうやめちゃおうかなと思った時期がありました。サイクルだから自主的にやれるし、練習も週四回だと気軽に入つただけで、現実には厳しく



それに練習すればまじくキミラーはおろか試合でも出してもかえらない。そこで挫折感というのが湧きそうという感じになって、こんな学生生活を送っているんならダブル・スクールで専門学校に通って何か専門的な知識を修得したほうがよほど将来のためになるんじゃないかと…。私はそこで踏みとどまったけど、現実には一年くらいでやめていく人って多いんですよ。

**宇野** スポーツではないんですけど、私が所属する同法会では模擬裁判というのがあって、全国大会もあるんですね。それに夢中になるって何週間も前から陳述書を準備したり、弁論の練習で、他の勉強ができなかったり、ましてやスポーツにまではなかなか時間が取れないんだけど、熱心に取り組んだ人ほど、すごく自信に溢れていて、自分だけがやってきた自分の世界を持っているんですよ。

**高濱** 何か核になるものを持っている人、自分はこれに関しては一所懸命やっているというものを持っている人は、その人を囲んでいるすべてがいいように回っていくような気がするんです。好循環が起きているというか、自分がこれは最低自信を持ってやってみるといっても、それがあれば、たとえ失敗しても、プラス・アルファを求めて恐れずチャレンジしていける。そういうところが可能性であるとか、行動範囲であるとかが、どことん広がりていく。

**竹田** 何もやらずに、学生生活を終えていく人も多いと思うんですけど。

**近藤** もっとないですよよね。

続けることで得られたものは？

**門井** 一つのことを続けてやっていて、その中で自分の天分というのが天職みたいなものが見つかるとかだと思いますね。僕の場合は、それが写真だったんです。記事はなかなか上達しないけど、写真だけはアトムだと自信を持っていえますね。

**近藤** いいですよ、スポーツカメラマンが一瞬を狙ってる空っぽ。

**高濱** その言葉は去年はじめて取材に来てもらった時のことだけど、ラクロスをはじめて見た人とは思えないほど、シャッターチャンスを見逃さず撮影してくれているのでびっくりした。

**門井** ファインダーを覗いていると決定的な瞬間の前って分かるんです。それに選手が必死になっているのに、それを伝えられないと失礼だから、僕もプレーヤー以上に試合に集中するよつに心がけています。そうじゃないと、いい写真は撮れないんですよ。

**竹田** うん、分かるような気がするなあ。スポーツ選手も、相手を負かそうと戦いながら、ふと心のどこかで尊敬しているときがある。一瞬のプレーの中に、こんな素晴らしいプレーができるこの人は、いったいどんな練習してきたんだらうって。だからこそ自分ももっと練習して勝ちたいと思っただけ、きついです。

**宇野** スポーツってクリアする目標が明確ですよ。人生に置き換えて考えてみても、その目標をクリアするためにどれだけ自分が努力するか、失敗したらそれをどうやって取り返すかとか、そういうプロセスが社会に出る前の貴重な経験になるのではないのでしょうか。

**近藤** 社会に出たときに、やっぱりかじりゃないと思う。辛くてもあんなに、人間関係も複雑になっていく。でも、クラブ活動をやっ



てるのと、同じように辛いこと、我慢しないといけないことを経験するわけで、そういうことを経験している、社会に出たとき必ず役に立つ時がくると思っただけです。

**高濱** そうだね、社会の縮図が経験できると思います。努力すれば、必ず報われるし、挫折の中で人の痛みも分かってくる。何よりもクラブの中にはいろんな人がいて、そんな個性がぶつかり合うところもあるけど、勝利という目的に向かってみなが、一体になれることも学べる。

**竹田** もってる勝つことは大事だ、だけどだからと言ってみんなチャンピオンになれるわけではないんだし、とくに同志社のキャンパスにおいては、さまざまな価値観があつていいと思っただけです。体育会に入つてトップアスリートとして日本一を目指すのもいいし、サークルや同好会でそれぞれのレベルでスポーツを楽しむのもいい。友だちづくりのためにスポーツを行うのもいい。大切なのは、4年間、目的を持って汗を流して練習する、その過程なんだと思えますね。だから、いまスポーツしている人にはぜひ続けて欲しいし、やってない人も、授業に参加するなどで、スポーツを積極的に日常生活に取り入れて欲しい。また、母校の試合を観戦に行くことからでもいいから、スポーツと係わりを持ってもらいたいと思います。今日はいろいろな話を聞かせてもらって、本当にありがとうございました。

## 私の体験レポート

Summer 1 軽井沢で創造力を開発する

## 創造科学教育研究所夏期研修

創科研夏期研修は、軽井沢の「加藤科学振興会軽井沢セミナーセンター」を利用して、毎年夏に実施されている。今年は八月八日から二十五日までの十八日間、出席者は工学部大学院生七人と工学部生一人、そして大谷隆彦工学部教授ほか七人の先生方の参加を得た。加藤与五郎（一八七二—一九六七）同志社大学名誉文化博士が、創造教育の重要性を説き、その実践のために同志社大学工学部および大学院工学研究科の学生を軽井沢に招いて、科学技術分野における創造力の開発を指導されたのが一九五七年。以来三十余年、本学OBで、日本を代表する半導体研究者・発明家として知られる、山崎舜平氏の支援にも支えられて、この伝統の夏期研修は途絶えることなく開催され、静寂と規律が支配するストイックな環境の中で、反復訓練による創造的思考能力の開発と研鑽に励んでいる。

研修生活は、六時の起床からスタートする。

高原での爽やかな目覚めとともに、布団あげと室内の整頓をすませる。六時三十分、全員が前庭に出てラジオ体操、そして大日回村のジョギングに出かける。コースはその日のリーダーが決めるが、起伏のある林間道を約十五分、朝露を含んだ鮮やかな緑の木立の中をかなりのハイ

ペースで駆けっていく。

八時 朝食。ジョギングの後だけに、ほつておいても食が進む。一杯一杯、おやおや、誰かさんはもう一杯目、一方大谷先生は食卓に供された地元産の納豆をネタに、食材談議。席順が決まっていないので、思い思いの会話がはずむ。

食後の自由な時間を過ごした後、いよいよ九時から研修会が始まる。窓外に青々とした木々を望む研修者は、静寂に支配され、全神経を集中できるこのつえない環境。出席者のいでたちも先生方は背広にネクタイ、学生も普通の短パンルックからスラックス姿に変わっている。さつそく今日最初の発表者が立ち上がり、ホワイトボードに発表のテーマと論旨を書きとめ、発表に移る。テーマは「カーオーディオのステレオ感の向上について」。ステレオ感の原理からはじまり、発表の根拠となる先行音効果の説明に移る。3ms先行差はどのくらいによって10dB相当の先行音効果が得られるという。発表者は、このことにより右スピーカーの音を左スピーカーの音より、たとえば2ms先行させれば、両耳で感じる音のレベル差が増幅されステレオ感が増すと主張する。

発表後、一瞬の沈黙を破って大谷先生に、「ここまでが学説で、ここからが君の研究成果なのかはつきりしない。そもそも音の収録時に置かれる二本のマイククロフォンの位置関係で説明がつく問題では?」と厳しい意見が浴びせられる。「例えばオーケストラの中から、ある楽器の音だけを先行させることは可能なのか?」

「ステレオ感が増したとしても、それでは指揮者の意図をねじ曲げることにならないか?」など、先生方から集中放火を受ける。先生方は厳しく論理的に追い込んでいくことがこの研修の主旨であり、加藤先生の遺志を継ぐことだとい、発表者に「さつそく一回発表が回ってくるので、すでにネタが尽きている」といつて午前中いっぱい発表と質疑応答が続き、昼食後はまったくの自由時間。勉強してもよし、山登りに出かけてもよし。ただ、軽井沢の澄んだ空気のなかで、「創造力」を大いに働かせること。今、世の中に必要なことは何か。そのために科学は何ができるかを考えることのみが参加者には課されている。明日、発表が回ってくる久武さんは、「僕たちは、出された問題を解くことには慣れているが、問題そのものを発見



研修風景。発表者には鋭い質問にも答えられる確かな論拠が求められる。



REPORT 2

# 函館キャンプで結ばれた同志社の絆

川嶋 久佳さん

【商学部】  
3年次生

「同志社百二十三年の伝統、  
新島精神に学ぶ」

私が函館キャンプに参加した理由、それは「ただ、何となく北海道へ行ってみよう」というのが、正直なところでした。

しかし、何故かの事前ミーティング、そして実際にキャンプに参加して得たものは、素晴らしい友人や先方との出会いでした。学生課スタッフの方や先方の方のアドバイスのもと、学生自らの手で企画立案、準備を進めていくことによりて結ばれた絆は、想像以上に固いものになりましたと思います。

また函館キャンプに参加したことで「新島精

する」という思考には慣れていません。モノにあふれ、何不自由ない生活をしているので新たにこんなモノをーという発想が生まれてこないのだ」と語る。

十八日間という長期にわたる研修で学生たちが身体の面でも、また思考力の面でも疲れが出始めてきた頃、山崎舜平さんが顔を見せてくださり、研修会も山場を迎える。山崎さんは同志社大学工学部在学中に加藤与五郎先生の思想に共鳴し、自己訓練を重ねられた。その結果、大学院在学中の研究の過程で得た着想が数々の基本特許を生み出し、創造研究を遂行するために半

導体エネルギー研究所を設立された現在も、太陽電池や液晶ディスプレイなど、常に時代の最先端の研究開発で成果を上げておられる。今回研修会では「ベンチャービジネスと独創研究の実例」をテーマに講演の後、学生たちと懇談。大先輩の実績に裏付けられた話をじかに聞く機会を与えられ、この日を境に学生たちの目つきはがらりと変わりますねと言つのは大谷先生当の学生たちも「山崎さんの話を聞くと、世界を見ていく人という感じが、ひしひしと伝わってきますね」とにかくすごい人と言葉にし尽くせないインパクトを与えられたようである。

一八六四年に新島襄が国禁を犯して脱国した地、函館。毎年夏にその地を訪れるのキャンプは、新島の思いに触れながら、様々なテーマを持って行われています。十七回目を迎えた今年のキャンプには四十九人の学生が参加し、新たな友人たちとの出会いの中で、新島の生き方や同志社を見つめ直すとともに、自らをも省みる機会となりました。

の存在を知り、「同志社大学で学ぶ意味」を知ることができたのも、私にとって大きな収穫です。新島七五三太という、二十一歳の若者が函館から国禁を破り脱国、アメリカを目指したことに、現在の同志社大学が存在するとい

う事実。校相、新島襄の脱国の地、函館の港に立つ碑を訪れて、私たちの学ぶ同志社大学百二十三年の伝統をひしひしと感じ、ただ何となく通っていた大公子を、愛すべき母校と感じるようになりました。新島精神が今なおの根付いている同志社大学に学ぶ誇りを、持つことができたのです。



「新島襄海外渡航乗船の処」碑「脱国の碑」の碑前にて

## 加藤与五郎先生と軽井沢研修

加藤先生は、同志社大学の前身、ハリス理化学校に学び、後に渡米してMITのノイズ教授に師事されました。そこで科学技術の研究風土の違いを実感されたので、帰国後、東京工業大学に教授として勤められたら、創造の本質と創造教育の重要性を説き、実践されました。在任中の研究にもとづく発明特許は300件を超え、工業化のために設立された会社も十社に及びました。先生が一貫して主張されたのは「人の幸せ」に貢献できる科学技術の振興です。先生は、晩年私費を投じて、軽井沢に創造科学教育研究所を設立され、同志社大学の学生数人を招いて、科学技術分野における創造力育成の研修を指導されました。その後、先生の薫陶を受けた私も、同志社を継ぎ、できるだけ先生が実践されたスタイルを守って、毎年研修を行っています。



加藤与五郎の像



大谷 隆彦  
【工学部教授】

市岡 京子さん

【工学部】  
3年次生

「不安、奮起、そして出会い」

「もっとたくさんの友達をつくりたい。そう感じていた私は、今年函館キャンプに参加しました。初対面の人ばかりの中でうまくやっていけるのか、ずっと不安でした。各グループのグループワークでは、ゲームをしたり、恋愛をテーマに話し合ったり、函館の街を探索したりと、楽しい日々でしたが私たちの班は事前の用意が足らず、毎晩本当に苦労しました。テーマに対する意見を交わし合ったり、自分から話をかけたりしながら、いろいろな考えを持った人の話を聞くことができ、多くの友達と出会えました。こんな貴重な体験ができる函館キャンプに参加することができて、本当によかったです。



左から小山 信一郎(経・4)さん、  
坪内 香織(商・1)さん、  
古賀 尊幸(経・4)さん。

# バツクバツクひとこの山荘生活

REPORT 3 「自然科学実験法・同実習」

「この三日間で、何か大きなニュースはありましたか？」山から下りてきた学生の口から、こんな言葉が飛び出した。自然科学研究の実習として、毎年夏に行われる研究台宿。自然環境の保護地区に指定された、北山山中のありのままの自然に抱かれながら、電気もガスも水道も通っていない山荘(新心荘)での生活で、彼らが学んできたものは…。

三日間の実習を終え、下山してきた学生三人に話を聞いた。



森の中で展開される、植物の生存競争は興味深い。

本当の意味での自然を体験してみてもうでしたか。  
**坪内** 山荘はしっかりと建物をしたけど、アオタイシヨウウのフンと脱け殻だらけ。到着して最初の作業は、みんなで大掃除でした(笑)。古賀 電気もガスも水道もないと聞いて、これは面白そうだと思います。中途半端に道具があるより、何も無い方が逆にワクワクする。でもアオタイシヨウウの脱け殻はスゴかったね。こっそり財布に入れようとしてたりして…。  
自然を守るという意味から、現地では洗剤はもちろん、歯磨き粉も使わないと聞きました。

**坪内** 不安がなかったと言ったと嘘になりますけど、行ってみると思ったより不便さは感じませんでした。川の水で野菜を洗ったり、飲み水に使ったり、結構平気なものです。  
古賀 逆に普段の生活に不必要なことが多いと感じました。例えば必要以上に洗剤を使ったり、たくさんゴミを出したり…。これからはもっとシンプルな生活を心掛けたいですね。  
学習の成果は？  
**小山** 昼間は自由な時間がほとんどなく、廃村を歩いてまわったり、植物や水生昆虫の種類や数を調べるといった研究活動が中心でした。  
古賀 目の前にある木や生物を、見たり触れたりしながらの実習は大きな収穫でした。自然の中でのリアルなやりとりが、実感として分かるので、興味を持って調べられたし。  
**小山** 幹の太い木が斜めに生えていたり、いろんな種類の木が入り組んで生えていたのが印象的でした。他の木をおしのけて日光にあたるようにしているんです。生存競争ですよ。田辺



採取してきた木の葉をもとに、植物の種類を調べる。

ヤンパスなんて自然がいっぱいだと思っていたけど、同じ種類の木が多いから、そんな競争は見られないですね。結局どの木もまっすぐに伸びて同じような高さに育っている。やっぱり本物の自然はすごいリアルでした。  
古賀 だと水生昆虫の時は苦痛でした(笑)。種類が多く、しかも小さい。それを顕微鏡で見ながら、一匹一匹調べるのは骨が折れました。  
**坪内** 水中に棲息する虫の種類が環境を評価するひとつの基準になっていることも初めて知りました。でも、あんな小さな虫を、先生はひと見ただけで名前がポンポン口から出てる。先生の頭の中で虫だらけかも(笑)。  
**小山** その川の水をペットボトルに入れて飲んでいたことを思った。ちよっとシヨックです。  
**坪内** でも虫がたくさんいるっていいことだよ。この水がキレイってことなんですよ。  
**小山** 普段気にも止めないことを、意識させられたというか、あらためて気付いたというか…。そんな三日間でした。  
もし現地での生活がもっと長引いたらどうでしたか。  
古賀 なんかの方が楽しそうですね。今回はお膳立てが整っていたし、楽だったと思います。もっと冒険っぽくすると面白いんじゃないかな。  
**坪内** 私もまだ山に居残ってもよかったですね。たった三日間でしたが、自然に囲まれた生活を体験して、今の便利すぎる世の中に少し嫌気がさしました。こんなに地球や自然環境に反する生活をしていいのかな…。



# 中国返還後の 香港に見る 濃密なる多民族社会



香港の友人たちと夕食。中央が和田さん、右端がよし君、右から2番目のラム・ウェイホンさんは3年前、当時中文大学からの交換留学生として1年間同志社大学で学んだ。

私は三年次に交換留学に出願し、四年次の八月から香港中文大学に留学しました。ちょうど香港が英国から中国へ返還されて一カ月後のことです。私が香港に興味を持った最初のきっかけは、一年の時、インドネシアからの留学生デビッドと香港の交換留学生クリスの二人の華人留学生との出会いです。デビッドはインドネシアで生まれ香港で教育を受けた華人。インドネシア語、英語、北京語、普通語、広東語、潮州語、日本語を話します。クリスは香港生まれで、中国人ですが普通話ばかりせず、広東語を話します。彼自身は中国人ではなく香港人であるという認識を持っています。私は非常にショックを受けると同時に、香港とはどんな国なんだらうと興味を抱きました。

それから二年間、その疑問をきつかけに国際交流サークルをつくったり、休みに海外へ、できる限りの貧乏旅行、第二外国語で中国語インテンシブや会話の授業を受講したりしました。しかし、その疑問や興味は止むどころかすつと大きくなっていったのです。彼らのような人種、文化の多様性のある社会はいかにしてできたのか。現地で生活してありのままの社会を体験したい。今度は自分が留学生になるのだ。そんな簡単な動機から留学を志願しました。

現地での授業は、語学として中国語（北京語）。専門の勉強は英語にて行い、普段の生活は広東語。部屋は香港人の学生との二人部屋です。この留学が何より良かったのは、現地大学の諸プログラム、ホームステイ、旅行、バイト等を通して幅広く様々な方に出会えたことです。出稼ぎに来ている東南アジアの労働者、中国の国境の町、深圳で会社を起ころうとモンゴルからやって来た人、講演会で必死に香港の民主主義を訴える政治家、その支援をする学生。そんな彼らと、聴衆としてではなく、直接話す機会を持ったことが何より大きな経験となりました。そして香港という狭い町を通して、日本の外で起きている現実を知りました。友達のカリスの二人の姉は最近結婚し、それぞれカナダと台湾の国籍を取得



和田 拓之さん

【法学部 4年次生 / 香港中文大学留学】  
97年9月 - 98年5月

1997年、中国返還後まもない香港に留学。多様な人種や言語、文化が混在する多民族社会で、その複雑なルーツを目の当たりに。帰国後は日本文化の多様性にも関心を抱きはじめたという。

しました。同志社出身の友達、よし君もアメリカに留学するために香港で働き始めました。香港を媒介にして、それぞれが世界といっつイーランドで力強く生活しています。

香港は一九九七年七月に中国に返還されました。香港のメディアでは中国内陸の事情がより多く取り上げられ、大学でも今までは学会や講演会等は欧米との関係で多く行われていましたが、より大陸との交流が多くなり、中国語（北京語）で行われる学会や講演会が増えました。香港の学生にとっても中国内陸の大学が選択肢として受け入れられつつあります。面白いのは大陸からの先生が増えたのですが、香港人の学生は北京語ができる人が少ないので英語混じりで授業を行っているという状況です。日本に帰国してからは日本の文化の多様性にも目が行くようになりました。香港で生活したことで自分と自分の国のことを再認識し、日本で起きたことを世界の国との関係で考えるようになりました。

同志社には設立以来、国際主義が息づいていると思います。特に近年は交換留学制度も充実し、海外との交流が盛んに行われています。在学生の皆さんにもいろいろな体験をして触発されて欲しいと思います。最後に、留学するにあたりお世話になった諸関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

# 就職活動で垣間見た日本企業の実態の現実 岐路に立つ日本型経営

株式会社の資金調達や組織運営を学ぶのが森田章ゼミ。法学部でありながら、経済学や商学的な知識・考察も欠かせない。就職活動での会社訪問を終え、日本経済の実態を肌で感じてきた四年生に質問をぶつける三年生……。ゼミで学ぶ会社法の視点やリーガルマインドは、実社会にどうつながっていくのだろうか？

**田井** 就職活動では、四年間を通して学んできた成果を十分にぶつけることができましたか？

**田中** 会社っていろいろは言利を基本に物事を捉えているから、自分の研究してきたテーマを話しても会社の利益につながらない事柄には、あまり興味を持ってもらえなかったというのが正直なところかな(笑)。

**日笠** 田中さんの研究テーマはストック・オプションでしたね？

**田中** 日本企業で導入しているところはまだまだ少ないけど、海外の先進的な企業では常識化しているし、日本でも採用する企業はこれから増えてくるはずなのに、実際は興味を持っている会社はまだまだ少ないです。

**坂野** ある会社を訪問した時に、会社において社長というのはどういう責任を負うべき存在か？と聞かれたんです。で、僕は会社法に「社長というのは表見支配人にあたる」と書かれているの思い出して、支配人としての義務を負うと答えたところ、人事担当者はそれは違っていていいんですね。実際の会社においては社長が取締役を兼ねていることが多い、だから社長の責任というのが多い、だ

法学部  
法律学科  
「森田 章ゼミ」



任なんだと、間違いを指摘されました。

**安松** 確かにあやぶやな知識では歯がたたないですね。

**日笠** 僕も、さまざまな会社を回りましたが、人事の方の口から絶えず出てきたのがグローバルスタンダードという言葉です。まるで判で押したように、「わが社は、グローバルスタンダードに基づいて、国際的な評価を高めていきます」という表現をするんですね。このグローバルスタンダードというのはアングロサクソンの考え方で、当然日本とは、考え方も違えば、会社の運営の仕方も違つわけです。これを無条件で取り入れてもいいものか？ またグローバルスタンダードの根底にある弱肉強食の考え方を、日本の社会がそのまま受け入れられるのか？と疑問に思つたんです。

**井上** マスコミもグローバルスタンダードとさかんに言いますが、実態はごなんですか？

**田中** 大企業では、年功序列を廃し、実力主義による賞金体系を取り入れるところが出てきたけれど、中小企業ではそうした会社はベンチャー企業などまだまだごく一部に限られているのが現実でしょう。

**日笠** ただ、アメリカ的な経営を志向している企業でも、いまグローバルスタンダードを取り入れておくと五年後、十年後には業績が持ち直し、英米のように景気的好循環がもつてく





るといふような安易な考え方がベースになっているように思いますが…。

**田井** 先ほどの日笠さんの発言にあったように、僕も日本の社会とアメリカの社会は根本的に違うと思う。戦後 GHQによってアメリカの商法が日本に持ち込まれたけれど、それが日本社会に馴染まなくていくつもの弊害が生まれたという歴史を考えてみても、グロバルスタンダードには難しい面があると感じています。

**井上** でも、今日のような国際化時代になると、規制緩和にしても、情報開示にしても、パッシングというか海外からほとんど要求が突き付けられるじゃないですか。それをクリアしながら、日本の文化風土を根拠にしたグロバル化を実現するというのは可能なのでしょうか？

**日笠** 問題の解決にあたって、森田先生はよくアメリカの大学の研究者の説を引き合いに出されますよね。その学説をそのまま使っただけじゃなくて、その中でそれが日本に適用できるかを比較吟味するために。

**田中** たとは「終身雇用」といういかにも日本的な制度一つを例にとると、終身雇用をこのまま続けていけば世界の市場で他国の有力企業と対等に戦っていけないという問題意識は、経営者の中にすでにあったと思えます。ただステークホルダーを重視するのが日本企業の基本的なスタンスだし、みんなで仲良くやっていきましょうという共同志向が強いから、そうした意識を断ち切れない部分が多いと思うんです。

**井上** そうした日本企業の実情の中で、私たちは会社法の勉強をどう生かしているのか、私

4年次生



田中 由美子さん



坂野 嘉則さん



安松 由佳理さん



日笠 隆行さん

3年次生



井上 麻実さん



田井 雅人さん

ゼミ生諸君は、優秀な人が多く、大いに期待しています。ゼミでは、経済・社会問題を見つけ出し、これを分析し、そしてそのことについてこれまでどのような議論があったのかを学習し、しかるのちにその問題の解決方法にはどのようなものがあるのか、その中で最適のものはどうなるのかを思考します。学習するだけではなく、視点を明確にして問題を検討し、解決方法を見出すという指導者としての判断能力を身につけてもらいたいと思います。

コーポレート・ガバナンスという言葉が流行していますが、それによって何をどうしようとするのかということに問題意識の焦点をあてて欲しい。校祖新島襄は、明治において日本の近代化を考えただけでも、私たちは平成において金融制度等の近代化を考えるということになります。明治以降、日本は近代市民社会に入ったけれども、多くは官僚中心の計画経済でした。いままさに、企業の在り方について文明開化の時期ですが、「民法出て忠孝減ぶ」とならないようになって欲しいものです。



森田 章  
【法学部教授】

しよつかつ

**安松** 会社法で学んだことを生かすんじゃないかと、勉強の仕方というか方法論を生かすという

ことではないかと思えます。たとえば、アプナイといわれている銀行でも、自分がその銀行のファクトブックを取り寄せ、世情に言われているように本営に経営状況が悪いのかどうかを調べることが私たちにできるんです。

**坂野** 僕の場合は、ゼミで学んだことにより、森田先生の考え方に触発されて、いろんな角度からものを見られるようになったのが大きな収穫です。

**日笠** 確かに法律というのはさまざまなノウハウを可能にしてくれます。経営を法律論的に考えることもできれば、また判例に基づいて現在の結果から将来を考えていくこともできるんです。

**田井** 森田ゼミのあの自由な雰囲気は、やはり先生の人柄からくるんじゃないでしょうか？

**田中** 私は、森田先生の人柄に惹かれてゼミを選んだんだけど、実際のゼミに出てイメージが変わった（笑）。

**坂野** そう、たとえば卒論でさステーマも枚数も自由なだけに、実はその裏には、先生の期待という無言のプレッシャーがあるんですよ。

**安松** 先生にしてみれば、「枚数は自由だけど、それは君たち自身の自尊心の問題だ」といってどうですか？

**日笠** ところで、田井君と井上さんは卒論のテーマはもう決まりましたか？

**田井** 僕は、まだ決まっていませんが、会社法で最近の問題になっているものをやろうと思っています。

**井上** 私は多少ミスターハートなところがありますが（笑）、新聞にもよく取り上げられている株主代表訴訟を取り上げようかと思ってます。

**四年次生** 頑張ってください。

# 悲願のワールドカップ 出場を終えて！

**南木** 小島さんといえは、やはりあの歴史的なワールドカップ・フランス大会についてお話を聞いて見たくなるのですが…。

**小島** そつですわ、これほどもで日本全体が熱くなるとは、正直思っていますんでした。マスコミを通じてさまざまな情報が伝わり、一勝二分はいけるだとか、一勝一敗二分でいいだとか、戦前の予想も大いに盛り上がりを見せていましたね。結局は、ご存知のように三戦全敗で終わりました。この結果も、厳しい現実を知るといふ意味では、よかったですわやあないかと…。もちろん満足はしていません。ただ結果は結果として受け入れないと、今後につながりませんから…。

**南木** サポーターもずい分盛り上がっていましたね。あんなに大勢が応援に駆けつけて…。  
**小島** サポーターの応援は、非常に心強かったです。感謝しないとイケませんね。ただフランス



ンスに行ったのに、あまりに日本人が多いので国立競技場でやっているような錯覚を覚えました(笑)。選手のみならず、まるで国内でやっているよつだと感じていましたから、その意味では余計なプレッシャーを感じず、平常心でプレーできたということでしょうが、本心を言えばもう少しワールドカップの雰囲気を感じたかったですね(笑)。

**南木** それにしても、フランス行きが決定するまでの過程がたいへんだった。きつと苦勞があつたと推察しますが？

**小島** 私は、あまり苦労していません(笑)。  
**南木** 監督が更迭されたとき、最年長であり、U-19プレイヤーでもある小島さんの骨折りがあったと聞いていますが？

**小島** 最年長であることは事実ですが、U-19プレイヤーというのは、セvensでしょう。  
**南木** 加茂監督の更迭が決まった日、小島さんが呼びかけて、みんな集まってお酒を飲む機会を設けたと伝わっていますか？

**小島** 私が呼びかけたわけじゃなく、井原主将なんかが中心になって、「ちょっと一杯やろうや」ということになったんです。別に強制的に集めたわけでもなく、練習後みんなが三三五五集まって…という感じかな。その辺りはサラリーマンと「いっしょに一杯やろ







詞のよつにいわれていますね。  
**小島** イメージ通りに体が動き、ゲームに出られるようになったのが、二十七歳。プロになったのも二十七歳で、日本代表に選ばれたのは二十八歳。あと五年はプロを続けたいと、私の人生設計は赤字なんです(笑)。  
**南木** ワールドカップで日本代表の課題は分かった。日韓が共同開催する二一年の大会に向けての懸念はいかがでしょう?  
**小島** 戦術的な面は、協会の強化委員会が決めていくことですが、個々の選手についてはスキルアップ、身体能力のアップが、今後世界のトップレベルと戦っていくには不可欠でしょうね。戦術面では日本はもともと強いんです。チームプレーはしっかりできていますし、選手

当時はまだJリーグがなく、プロ契約もできないのでサラリーマンとして入社しました。ところが、この間のフランクが災いしたというが、太ってしまったんですね。しかも、ウエイトを落とさずプレイしたから早く怪我をしてしまっ。怪我リハビリを繰り返してゲームに出られない日々が続きましたね。いまに思えば、体重を支えるだけの関節や筋肉ができていなかったんですね。そのうえ若いから結果を焦りすぎて、無理をしてしまいました。

個々の戦術に対する理解力は高い。問題はワールドカップを観戦されて感じられたでしょうが、パティストウターやスーケルのように個人技で抜いてくるような選手にかかった場合、戦術やチームのコンディションだけではいかんともしがたいたんですね。やはり選手個々のレベルアップを図っていくしかない。  
**南木** 最後にうなずきました。後輩の私たちに何がアドバイス。  
**小島** ゴールキーパーというのは、他のポジションと違って練習が難しい。私の場合、コーチが付くようになったのは二三年ほどです。それまでは自分で課題を見つけ克服するための練習方法を考え、試合で試しながらスキルアップを目指してきました。こうしたやり方は同志社時代に身に付けたもので、いまの自分があるのも自主性を重んじる同志社の校風のお陰だと感謝しています。その意味で、後輩の諸君にも与えられたものだけをやると、なく自分が興味を持ったこと、関心を抱いていることを徹底して追及して欲しいと思いますね。  
**南木** ありがとうございます。  
 がとうございました。



INTERVIEWER

南木 健二さん

【法学部法律学科】3年次生

小学生の頃からサッカーに親しみ、真岡高校(栃木県)時代はミッドフィルダーとして活躍。同志社入学後はサッカー同好会「ラッキーストライカーズ」に所属。今年、「J-同志社の五代目チェアマン」。



ワールドカップ日本代表の素顔に接して

日本サッカー界の永年の夢であったワールドカップ決勝大会。歴史的なピッチに立つことはなかったとはいえ、日本代表の一員として世界の強豪と戦ってきた小島選手にお話を伺うことは、僕にとって歴史的な事件。出場機会をつかめなかった悔しさを超えて、ひたすら謙虚に、そして冷静に事実を追認しようとする姿勢に、ああこれがプロなんだと感心させられました。「もし、ゴールマウスを守っていたのが、小島選手だったら?」という拙い質問に、「あのシュートが取れたとか、取れなかったという問題でなく、ゲームそのものがまったく違った様相を見せていたでしょう。川口選手が迎えたピンチは、私がゴールを守っていたらなかっただろうし、代わりにもっと大きなピンチを招いていたかもしれない」というコメントをいただきました。その言葉の中に、11人の個性が織りなすサッカーの魅力が教えられるとともに、「もし、自分が守っていたら...」という仮説に答えを出すため、2002年に向けての小島選手の新たな挑戦が始まるのだと感じました。



## 神学部「メディアと宗教」 授業でプロモーション・ビデオを制作



神学部関谷直人専任講師が担当する「キリスト教文化学演習 5」は、キリスト教とメディアが歴史的な歩みの中でどのような関わり合いをもってきたかを学ぶ科目。今年の春学期の授業では、20余人のクラスを4つの班に分け、『神学部を高校生に紹介する』という想定でMTV風のプロモーション・ビデオの実作に挑戦。講義最終日の7月16日の期限ぎりぎりでも無事完成し、同日4講目の授業で鑑賞会を行った。

完成したビデオの内容は、「神学部学生へのインタビュー」「神学部教員による学部・開講科目紹介」「キャンパス案内」「視聴者へのメッセージ」の4部で構成。班単位でこれらのテーマを分担して映像から音響までを制作し、クラスの代表者がつなぎ合わ



せて30分の紹介ビデオに仕上げた。

全体を通して大胆なカメラ・ワークが施され、絶妙な音響効果が画面を盛り上げているあたりは、まさにくろうとはだし。前半ではまず、視聴者が最も関心を寄せる同志社のキャンパス・ライフや神学部で開講されている科目の内容を、学生や教員が生の声で分かりやすく紹介する。そして、後半はクラーク館やチャペルといった建物群を、プリクラ感覚の画像処理で楽しく紹介した後、最後は「求めたら」「与えられるの?」「人生って何?」「隣人ってだれ?」「切れそう」「イライラする」「自分を知りたい」……、といった無声のコピーが次々と展開。「神学」が追い求める「生きる」ということへの問いかけを発してビデオは終了する。

今回のビデオ制作にあたって監督、兼ナレーター役を務めた豊田玲子さんは、体育会フィギュア・スケート部に所属する3年生。練習と授業だけでもかなりハードな生活を送る中でこの役を引き受けた。ナレーターとして「中身のあることを、笑顔を保ちながら1分間

話す」ということの難しさを話してくれた豊田さんだが、同時に、この授業で初めて知り合い、お互いをまだ十分に理解していない友人同志を「1つの目的に向けて意見を調整し、まとめていく」貴重な体験をしたという。以前から映像やコンピュータに興味を持ち、今回は主にコンピュータ・グラフィックを駆使して特殊効果のきいた映像づくりに一役かった3年生の高田太さんは、5月の連休が明け、7月までもう時間の余裕がないと気付いてからは、授業がなければ自然と寧静館のメディア工房に足が向き、編集作業をしていたとか。「授業だとか、これで2単位だとか考えたら割り切れないくらいしんどい作業だったけれど、大学へ入学して初めて何かをやり遂げたいという充実感がある」と話してくれた。

そんな高田さんの意を察してか、ビデオ鑑賞を終えた関谷先生は、「皆さんには6単位をあげたい気分です」と、その完成度にすっかり満足の様子であった。



## 法学部主催「第5回刑事裁判模擬法廷」が、多数の傍聴人を集めて開廷！

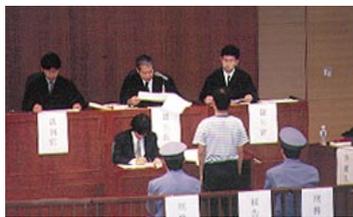


今年で第5回を迎える「刑事裁判模擬法廷」が、去る6月8日、田辺キャンパス恵道館201番教室で開催された。

教室壇上は、裁判所そのままに、正面奥に裁判官席、向かって左に検察官席、右に弁護人席、中央には証言台が設けられている。傍聴席のどよめきを背に受けながら、手錠、腰縄姿の被告人が二人の刑務官につき添われて入廷。続いて裁判官が左陪席、右陪席を引き連れて入廷すると、傍聴席はしんと静まりかえった。「起立！」「礼！」「着席！」の廷吏の号令が廷内に響きわたり、「平成十年（わ）第二二二二号 強盗致傷被告事件」が開廷した。

本件は、飲酒癖がある被告が、飲酒のうえ、深夜駐車場に駐車中の自動車に開錠して入り込み、金品を物色中に、自動車の所有者であり、本件の被害者とその妻に発見され、逃走を試みるが、その際被害者をつかみ合いになり、駐車場横の

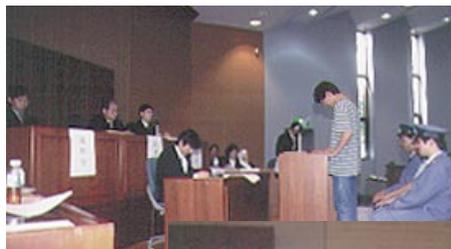
構内に転落、被害者に通院治療10日の打撲傷を負わせた。検察側は、本件で強盗致傷罪を主張。



一方、弁護人は窃盗未遂にとどまるとして争われた。

横縞のシャツを着用し、らしさを演出した被告人に紛するのは当法廷のシナリオを書いた法学研究科の横田さん。飲酒癖という負い目と当夜の記憶が定かでない被告人の頼りなげな内面を見事に演じる。裁判官、検察官、弁護人に紛した先生方の陳述が脇を固め、証人役を買って出た大学院生の小寺さん、松村さんの熱演が光る。

裁判は、人定質問とそれに続く起訴状の朗読に始まり、判決の言い渡しで結審するまで、通常の刑事公判の手続きにのっとって進行するが、微に入った法廷でのやりとりが、プロットを含んだ推理小説のように傍聴席を引きつける。この模擬法廷、法学部以外の学生も聴講が可能。このような機会に、法が執行される実際の場を臨場感豊かに疑似体験してほしい。



### おわびと訂正

本誌NO.115号に誤りがありました。おわびをして、訂正をいたします。

1頁〔表紙の人〕4行目

×誤り「……、私のゼミに来なさい」

訂正「……、商学部へいらっしやい」

～人とクルマ、自然との調和を考える～

(社)自動車技術会

# 「カラーデザインコンテスト」

(社)自動車技術会が主催する学生会員を対象にした「カラーデザインコンテスト」が本年度も実施され、各自動車メーカーのデザイナーからなる審査委員会において、藤本・千田研究室在籍の川口さんと田中さんが、それぞれ最優秀賞・入選に輝き、5月22日に表彰されました。

最優秀賞



川口 文悟さん

【工学研究科 機械工学専攻】大学院 1年次生

入選



田中 智之さん

【工学研究科 機械工学専攻】大学院 1年次生

「人とクルマのコミュニケーション」

私たちが在籍する藤本・千田研究室では、ガソリン・ディーゼルエンジンの環境との共存を目的に、その改善に向けて燃料噴霧や燃焼についての研究を行っています。エンジンというクルマの一部に特化した研究活動の中、今回出展したコンテストは、人とクルマの関係という広い視野でクルマを見つめ直すいい機会だったと思います。色や形と違って実感として分かりにくい安全性や構造を、誰もが理解できるように提案したい。そこで考えたのが透明ボディの「スケルトン・ピククル」です。デザインや色だけでなく、「安全性」も視覚化することにより、もっとクルマに対する理解を深めることができるのではないのでしょうか。

また、環境対策においても同じような想いがあります。私は自動車が好きで、自分の好きな研究ができるという理由でこの研究室に入ったのですが、研究を進めるうちに、世の中の人々のクルマ社会に対する認識はどれほどのものなのかと考えるようになりました。実際、自分も自動車がないと生きていけない世の中を当り前のようにとらえ、人間と自然との調和という大切なことを忘れていたような気がします。環境対策は決してエンジンだけに課せられたテーマではありません。排気ガスによる環境汚染や地球温暖化が、これほどまで大きな社会問題となった現在、それを使う私たち一人ひとりが関心を抱き、もっと理解を深めなければ、その改善は望めないのではないのでしょうか。日々の研究を通してそのような気がしてなりません。

環境対策に国境はありません。それは地球規模で取り組んで行かなければいけない問題であって、いくら環境に配慮したクルマを開発しても、日本だけで使っている地球全体としての改善策にはならないのではないかと。そんな疑問を抱き、私はトヨタの「プリウス」を、世界の国旗で彩ったデザインを提案しました。

環境問題は、考えると非常に複雑で、単純に自然を守るために森林伐採を止める、というわけにはいきません。コスト的な問題もあり、すべてのモノを環境に適合させるのは難しいことです。実際のところ私も企業に就職したら、何もかも「環境第一」に取り組んで行くことは難しいと思いますが、環境に対する今の気持ちを

大切にしながら、将来もモノ作りにたずさわって行けたらと考えています。  
今は川口くんと同じ、燃料噴霧の研究に取り組む。土曜日や日曜日も研究室に足を運ぶこともしばしばです。これが直接将来の仕事に結果するかどうかは分かりませんが、実験結果に対するアプローチの仕方やモノの見方を学んでいるという意識で、それぞれのテーマに沿って実験をしたり、文献を読んだりしています。実験は院生と学部生で構成される班で行い、毎日帰宅するのは九時か十時頃。時にはもっと遅くなったり、研究室に泊り込むこともあります。周りの人から見ると、しんどい生活のように見えるようですが、自分のしている研究が地球環境に役立つと信じて頑張っています。

「世界共同で考えるクルマづくり」

# 1997年度 大学決算について

財務部 経理課

1997年度大学決算は、5月14日開催の大学予算委員会および大学評議会、  
5月30日開催の法人理事会において承認されました。

## 収入の部

学生生徒等納付金は211億円で、収入総額に占める割合は76%となります。

手数料は12億円で、入学検定料が主なものです。入学志願者数の減少により予算額を3億円下回りました。

寄付金は3億円で、教育研究施設等整備資金寄付金、奨学寄付金、教育研究基金宛寄付金および機器備品・図書等の現物寄付金などです。

補助金は26億円で、国庫補助金が主なものです。そのうち経常費補助金一般補助金の調整係数の好転および特別補助の補助項目増などにより予算額を3億円上回りました。

資産運用収入は7億円で、基本金引当資産の運用収入および預金等の受取利息・配当金などです。

事業収入は2億円で、企業からの委託研究費などの受託事業収入が主なものです。

雑収入は8億円で、私学退職金財団からの交付金収入が主なものです。

分担金は2億円で、法人業務に対する法人内諸学校の負担分です。

固定資産除却額は4億円で、当年度除却固定資産に係る取得価額です。

借入金等収入は3億円で、当年度建設事業に対する借入額です。

収入の部合計は、使途特定の特定支出準備金取崩額を加えて279億円となり、補助金の増額などにより予算に対して2億円の増収となりました。

## 支出の部

人件費は133億円で、支出合計に占める割合は51%となります。

教育研究経費は75億円で、大学の経常的な教育研究活動に要した経費です。教育研究装置等整備費補助金に係る申請予算の未執行残、研究費および奨学寄付金・委託研究費等について予算の次年度繰越による未執行残、光熱水費について料金単価値下げ等による執行残、賃借料について情報処理機器等の契約変更による執行残など事業費の執行残により、予算額を4億円下回りました。

管理経費は8億円で、大学の維持管理に要した経費です。主に経費の節減による執行残により予算額を下回りました。

施設関係支出は3億円で、ハワイハウス改修整備、学術フロンティア研究施設整備、冷暖房空調整備、田辺別館増改築設計監理費などの施設整備事業が主なものです。

設備関係支出は13億円で、教育研究用機器備品・図書など固定資産の取得によるものです。

借入金等返済支出は6億円で、過年度建設事業に係る借入金の返済額です。私学事業団借入金については償還計画にもとづき予算計上どおり返済をおこなっています。なお、市中銀行借入金については、自己資金を留保するため計画にもとづき当期の返済を繰り延べています。

第2号基本金組入額は、組入計画にもとづき、教学施設整備資金10億円、情報基盤整備資金2億円など合計12億円を組入れています。

第3号基本金組入額は、組入計画にもとづき、同志社大学奨学基金5億円、学部教学充実基金・学術奨励基金・国際交流基金に1億円を組入れたほか、特別寄付金および基金果実の使用残額など合計7億円を組入れています。

第4号基本金組入額は、法人全体の組入計算にもとづき必要額を組入れています。

支出の部合計は、使途特定の特定支出準備金繰入額を加えて263億円となり、経費の執行残および予備費の未執行などにより予算に対し5億円の減少となりました。

## 収支差額

収入の部合計から支出の部合計を差し引いた当年度収支差額は15億円の収入超過となりました。これは新たな研究科、学部・学科などの設置経費に係る自己資金を留保するため当期の借入金返済を繰延べたことによるものです。

累積収支差額としては、翌年度以降の消費支出に充てるための消費支出準備金繰入後の収入超過額8億円により一時的に改善され、翌年度に160億円の消費支出超過額を繰越すことになりました。

## 借入金

借入金残高は、当年度建設事業に係る新規借入金による3億円の増加があるものの、これを上回る借入金返済による6億円の減少により、前年度末に対し3億円減少し当年度末の借入金残高は115億円となりました。

## 累積赤字

消費支出超過額は内部資金の不足額であり、借入金は外部資金への依存額であります。したがって、この両方を合わせた金額が資金の不足額となります。

なお、この資金の不足額は前年度末の286億円に対して、当年度末は275億円となり、11億円減少しました。

(本文中の金額については1億円未満を四捨五入しています)

# 1997年度収支計算書

1997(平成9)年4月1日から1998(平成10)年3月31日まで

(単位:千円)

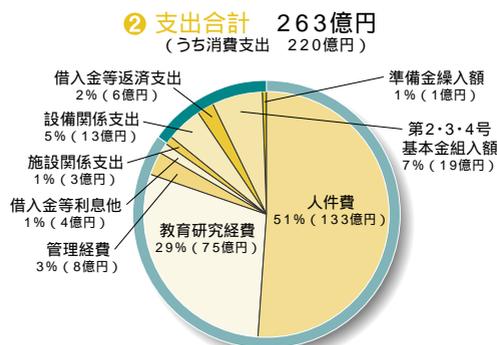
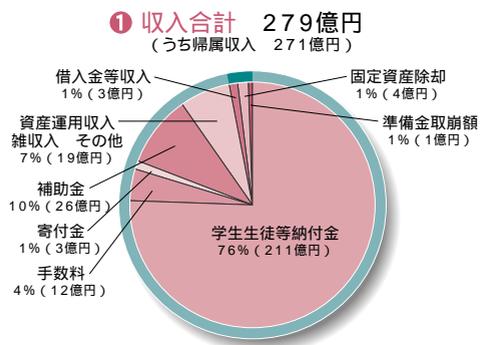
収入の部				
科目	予算	決算	差異	
学生生徒等納付金	21,012,170	21,103,144	90,974	
手数料	1,474,000	1,215,306	258,694	
寄付金	457,620	289,975	167,645	
補助金	2,312,050	2,634,078	322,028	
資産運用収入	607,730	657,742	50,012	
資産売却差額	0	14,217	14,217	
事業収入	93,160	155,258	62,098	
雑収入	821,430	849,975	28,545	
繰出金	9,270	17,652	8,382	
分担金	166,830	166,830	0	
帰属収入合計	(26,954,260)	(27,104,177)	(149,917)	
当年度固定資産除却額	303,770	352,561	48,791	
借入金等収入	361,820	346,924	14,896	
当年度未払金	0	897	897	
特定支出準備金取崩額	51,220	56,295	5,075	
収入の部合計	[27,671,070]	[27,860,854]	[189,784]	

支出の部				
科目	予算	決算	差異	
人件費	13,371,650	13,334,707	36,943	
教育研究経費	7,837,460	7,467,076	370,384	
消耗品費他	5,378,210	5,008,024	370,186	
減価償却額	2,459,250	2,459,052	198	
管理経費	890,360	843,321	47,039	
消耗品費他	803,290	756,255	47,035	
減価償却額	87,070	87,066	4	
借入金等利息	340,520	345,429	4,909	
資産処分差額	0	12,798	12,798	
徴収不能引当金繰入額	42,850	30,920	11,930	
徴収不能額	0	2,785	2,785	
繰入金	0	10,413	10,413	
予備費	70,000	—	70,000	
消費支出合計	(22,552,840)	(22,047,449)	(505,391)	
施設関係支出	246,130	279,685	33,555	
設備関係支出	1,228,750	1,296,348	67,598	
固定資産受贈額	0	38,321	38,321	
翌年度基本金組入額繰延額	5,690	5,933	243	
借入金等返済支出	635,710	636,807	1,097	
第2号基本金組入額	1,210,000	1,210,000	0	
第3号基本金組入額	670,650	676,950	6,300	
第4号基本金組入額	36,100	36,100	0	
基本金要組入額合計	(4,033,030)	(4,180,144)	(147,114)	
特定支出準備金繰入額	237,220	97,998	139,222	
支出の部合計	[26,823,090]	[26,325,591]	[497,499]	

収支差額				
科目	予算	決算	差異	
当年度消費収入超過額	(847,980)	(1,535,263)	—	
消費支出準備金繰入額	58,460	775,225	—	
繰入調整後消費収入超過額	[789,520]	[760,038]	—	
前年度繰越消費支出超過額	[16,781,530]	[16,781,532]	—	
翌年度繰越消費支出超過額	[15,992,010]	[16,021,494]	—	

借入金				
科目	予算	決算	差異	
前年度未借入金残高	[11,770,830]	[11,770,829]	—	
当年度借入額	361,820	346,924	—	
当年度返済額	635,710	636,807	—	
当年度未借入金残高	[11,496,940]	[11,480,946]	—	

## 収支構成図



消費収入超過額(①-②) 15億円

## 用語解説

### 収支計算書

学校法人会計基準にもとづく消費収支計算書においては基本金組入額を帰属収入から控除して表示しているため、収支の内容をよりわかりやすくするために、消費収支計算書に基本金組入計算に係る各項目をそれぞれ収入・支出の部に計上したのが『収支計算書』です。

### 基本金

第1号基本金は、学校法人が、教育研究活動に供するため、自己資金により取得した固定資産の価額です。

収支計算書において第1号基本金組入額は、支出の部に取得した固定資産(施設関係支出、設備関係支出、現物寄付資産)の額を表示し、さらに過年度取得した固定資産に係る借入金等返済支出を表示しています。また、収入の部に固定資産取得に係る借入金等収入、固定資産除却による再取得価額などを表示しています。

第2号基本金は、将来取得する固定資産に充てるための資金です。

第3号基本金は、基金として継続的に保持し、その運用果実により教育研究活動の遂行を支援するための資金です。

第4号基本金は、恒常的に保持すべき資金として学校法人会計基準が定める額です。

# 『スノー・ホワイト』

グリム・ブラザーズ

戦つ白雪姫！

——現代社会の求める女性像

『白雪姫』の話を知らない人はいない。悪地悪な継母、魔法の鏡、毒りんごなど、誰もがこの有名な御伽草のいくつかの場面を即座に思い浮かべることができよう。しかし、この御伽草のヒロインの精神年齢は、いったいいくつなのだろうか。継母「いじめられるがママの白雪姫——やらねたやちやり返せ」といった競争社会の原理は、白雪姫には無縁のものであるらしい。子供たちに人気のティズ・ニー・マニズでは、城を追い出され森に迷った白雪姫は遂方に暮れてたまたた歌を歌っていきるばかり——ティーンエージャーのくせに、ほとんどおまけに森で出会ったごびとたちと生活と共にするため、掃除や料理といった生活雑業をいそいそと引き受ける。姫のくせにそんな中産階級の道徳に迎合する態度でいいのだから、この不気味な老婆の登場となるが、この怪しいとか言いつつない登場人物を、すぐさま信じてりんなことを口にする白雪姫のあほさ加減、今の世の中、幼稚園児だつて知らない人からもらったものを食べたりしません。あけくの果ては、王子が現れてキスしてくれるまで眠ったままという究極の受け身人生——いいかげんにしてくれである。人生なめてんのか？！



現代の映画のヒロインは戦つ女性たまたまである。ホラー・ムビーにしてもSFにしてもラブ・ロマンスにしても女性は自分の力で勝ち進む。そして人生を勝ち取っていく。それなのに御伽草のヒロインは自分の力で人生に立ち向かうなんてことは微塵も考えず、苦境から自分を救い出してくれるかっこのいい男性（かっこの悪いやつに救われることも有り得るなんて「かっこのいいやつに救われていない」を恐れているだけ）に「かっこのいいやつはなんか勘違いしているだろ」と思わすにはいられない。

「かっこのいいやつ」は現代の要請を受けて登場してきたのが『グリム・ブラザーズ・スノー・ホワイト』である。「グリム兄弟の原作」と銘打っているが、原作をすいぶん現代風にアレンジしてあって興味深い。

継母と白雪姫の心理的葛藤をじっくり描いているついでに白雪姫が自分の力で人生を切り開いていく様子が好感をもてる。ハンサムなだけ取り柄の王子が、あっさり魔女に殺されてしまつた筋や、白雪姫が森で暮らすアウト・サイダーに反発しながらも、その内面の苦悩を知って、やがてふたりの間に愛が芽生えるという展開もつなげる。そればかりか絵本から抜け出したような美しい幻想的な映像は観る者を飽きさせない。幼い日に聞かされた無邪気な御伽草も、実は男性中心主義や中産階級の美徳といった「アオロキ」を内に秘めたものであったことに気がせきくれるなかなかの優れた「デオ」である。

## 「本学先生の新刊」

(学術情報センター調べ)

### 比較・選挙政治

——90年代における先進5カ国の選挙——  
梅津實 ほか著 ミネルヴァ書房 二一八 円

### 先住民、アジア系、アカディア

——変容するカナダ多文化社会——  
森川眞規雄編 服部民夫 吉田亮 執筆 行路社 三三 円

### 旧石器時代の考古学

松藤和人 ほか著 学生社 二一四 円

### シュライエルマツハーの美学と解釈学の研究

岡林洋著 行路社 四、 円

### 近松の時代

鳥越文蔵ほか編 山田和久執筆 岩波書店 四、七 円

### 絵画のメディア学

——アトリエからのメッセージ——  
岸文和ほか編 太田孝彦 執筆 昭和堂 二一、二 円

### 情報システム学へのいざない

浦昭二ほか編 三森定道 執筆 培風社 二一、三 円

### 流通パートナーシップ論

尾崎久仁博著 中央経済社 三三、 円

### 英雄から爆弾犯にされて

アトランタ五輪爆弾・松本サリン・甲山事件  
浅野健一編 三三書房 二一、三 円

### 西洋の歴史——近現代編——

(増補版)  
大下尚一 望田幸男 ほか編 山田史郎 執筆 ミネルヴァ書房 二一、四 円

# 『忠臣蔵とは何か』

丸谷才一著  
講談社 九五―円

御霊信仰を手掛かりに史的  
実をひもとく

今出川校地の西方五百メートル程の所に白幡神社がある。祀られているのは保元の乱で政争に敗れ、遠く讃岐の白幡に流されてその生涯を閉じた素徳上皇。寺社の多い京都の町では特に目立つというほどの神社ではないが、例えば、『兩白物語』に描かれた魔王となつても世を呪わんとした素徳上皇の凄まじい怨念を知り、また



た谷川健一著『魔の系譜』に記されたこの神社造営の経緯を知られば、その前を通るごとく何やら背中につそ寒いものの走るのを禁じ得ないだろう。政治的敗者は恨みをのんで死んだ後に御霊となり、天変地異などの災厄をもつて来る、という御霊信仰がこの白幡神社を支えているのだ。

古来より日本人の心の闇の部分とも言へき処で愚つてきた御霊信仰を手掛かりに、歴史的事件としての赤穂浪士の吉良邸討ち入りと、これを題材にして二百五十年もの間演じ続けられてきた『仮名手本忠臣蔵』を読み解いたのが、丸谷才一の『忠臣蔵とは何か』である。大石内蔵助を頭に戴いた播州赤穂の浪士四十七人が、旧主浅野内匠頭長矩の遺恨を晴らすために、吉良上野介の屋敷に闖入り、その命を奪った事件は、これまで専ら武士道や朱子

学の立場から論じられてきた。本書が極めてユニークなのは、この史的事実としての赤穂浪士の討ち入りそのものが、『曾我物語』の伝統とその底流を成している御霊信仰によって促された一種の演劇的、もしくは祭事的な事件であったという点から説き起している点である。更に、『曾我狂言』の連続興行によって悪王(将軍綱吉)の呪術的殺害に成功した庶民は、曾我兄弟同様に赤穂四十七士を御霊と見なし、赤穂事件を題材とした

『仮名手本忠臣蔵』を舞台にかける「こと」によって、悪政を露呈し時事や地震といった災厄を免れることを願った、と説明される。義士たちが山形様様の揃いの火事装束を纏つても、大石内蔵助が「大星由良之助」となるのも、そして外題に用いられた「忠臣蔵」という奇妙な造語も、民衆の呪術的な願いを表現するための無くてはならぬ様式であった。

専門家の立場からすれば異論もあるだろう。早野勳平がカーニヴァルの春の王であるという主張などは、実際、首をかけたくなる。だが、江戸時代以来の文献は言つて及ばず、フレイザーやバフチンまで引つ張り出して忠臣蔵の謎に挑んだ著者の情熱の裏に、現実世界に対して言葉とものが持ち得る力への深い信頼を読み取ることができれば、いっそ読後は爽やかであると言える。

滋賀県の民族芸能  
文化財保護課編集 山田和人ほか著  
滋賀県教育委員会

虫と日本文化

笠井昌昭著 大巧社

一、二 円

刑事政策

瀬川晃 ほか編 青林書院

三、八 円

京都企業家の伝統と革新

安岡重明 編著 藤田貞一郎 石川健次郎 執筆  
同文館出版

三、 円

財閥経営の歴史的研究

一 所有と経営の国際比較  
安岡重明著 岩波書店

七、六 円

生理心理学の基礎

藤澤清ほか編 岡市廣成 鈴木直人執筆  
北大路書房

三、五 円

マーケティング学説史

一 日本編  
マーケティング史研究会編 光澤滋朗 執筆  
同文館出版

三、三 円

考古学へのまなざし

一 地中から甦る本当の歴史  
森浩 一著 大巧社

二、一 円

特許法講義 (第2版)

仙元隆一郎著 悠々社

三、八 円

異文化交流と近代化

一 京都国際セミナー 1996  
伊藤彌彦 籠谷次郎 沖田行司 吉田亮 執筆  
大空社

八、 円

## 松本 賢一

言語文化教育研究センター専任講師

先生の推薦する

言語障害を通して、あらためて心の営みの深淵を知る。

自我介绍の前、私の職業である言語聴覚士（S.T.: Speech Therapist）について説明します。S.T.は一般に病院や身障センターなどの医療・福祉機関、教育相談所などで、聴覚や脳機能に伴う失語症、記憶障害、小児の言語発達遅滞、口蓋裂言語障害音（ヒモリ）等々、コミュニケーション障害全般の評価・治療を行います。現在私が勤務する名古屋第二赤十字病院では、脳卒中や脳腫瘍、頭部外傷で入院された患者さんを神経内科や脳外科の医師が診察し、これらの症状が認められた場合、言語室へ紹介し治療が開始されます。

## 第1回

# 「仕事」

My Life.

が仕事を通して見た「社会」とは？

ことの意義とは？

う先輩の声に耳を傾けながら、

生生活の現実を考える機会にしたいものです。



「こうした比較的新しく、社会的認知が乏しい職業を私がなぜ選んだか」といえば、まず言語聴覚士という職業の存在を知っていたことが大きいと思います。しかも身近にこの専門職に就いている人がいて仕事の内容に関する準備知識を十分に得ることができました。人間の存在に興味を抱き、人がとかく目を背けたがる「死」や「障害」に関心を寄せていた私は「この仕事に自分なりの意義を見つけた」。しかし本邦の言語療法の実情を熟知していた恩師は「私がこの道に進むことに対して必ずしも好意的ではありませんでした。その頃、S.T.の社会的身分は不安定で未知数の部分が多かったため、先生の目には火中の栗を拾う行為に感じられたのかも知れません。私は決断しました。そして卒業後、一年間の専門教育を経て当院へ。当時はまだ一般の病院では言語聴覚療法は目新しく、医師や看護婦にS.T.の職務内容を理解してもらうための啓蒙活動が主な仕事でした」

現在の仕事で苦労が多いのは、臨床に伴う患者さんとの人間関係です。人生の大先輩を相手に、子も孫のような年代の私達が「話せない」という人間性の本質に関する深刻な問題に触れるわけですから、患者さんが強い拒否感情を抱

くのは当然です。「私は障害を治すことはできないけれど、より良い回復にむけて最大限のお手伝いをさせていただきます」。この旨を毎日ヘルプボードで伝えます。失語症の場合、言葉によるコミュニケーションは困難なので、体をさすったり、身振り手振りなどあらゆるコミュニケーション方法を駆使して懸命に語り掛けます。このように臨床は、まず人と人との良好な関係を築くことから始まります。そのためには、患者さんに誠意をみせることが大切です。

最近の研修生を指導していて少し気にかかる点があります。報告書はきちんと作成し、病歴の知識も豊富なのですが、いざ臨床となると患者さんと「会話」ができない人が多いように見受けられます。時には患者さんから「あなたには私の気持ちが分からない」と叱責されて、臨床恐怖症に陥ってしまう研修生も少なくありません。「ヒモリしたら就職できるか?」「何をしたら就職に有利か?」など、小羊先の功利的な発想だけが先行し、仕事に対する姿勢がマニュアル化しているように感じられます。学業優秀、頭脳明晰なのに、どこかアパシーを引きずっている。そんな印象の学生諸君に物足りなさを感じているのは私だけでしょうか?



辰巳 寛さん

【1989年神学部卒業】

名古屋第二赤十字病院勤務・言語聴覚士



司法修習生として二年に亘る研修期間を終え、今春から判事補として広島地方裁判所に勤務しています。一度旅行で来たことはありましたが、不案内な地、しかも初めての一人暮らしというところもあり、任地が決まったときは不安でいっぱいでした。でも、今では各地から来る友達を案内したりと随分広島にも馴染みました。

思い起こせば、私が司法試験を意識したのは入学直後田辺キャンパスへ行く途中の坂道で、司法試験受験生を導く予備校のパンフレットを受け取ったときでした。大学を卒業しても、社会の勉強を続けたいという思いと、何か資格を取得したいというところから法曹を目指そうよと

My Job My Life

法服をまとうと、間違っ  
た判断は許されない！

## シリーズ

『ONE PURPOSE』では、さまざまな分野で活躍する先輩を訪ね、毎号「私と仕事」をテーマにお話を伺っていきます。

# 私と「My Job,

社会へ出てかれこれ？年。先輩たちあるいは「生きる」

歩んだ道も経験もそれぞれ違

将来の自分にふさわしいキャリア・プランと学

法意しました。しかし、四回生での受験は不得手な択一(マークシート方式)を克服できず失敗。翌年、大学院に通いながらチャレンジして無事合格し、現在は法服を身にまとい、陪席に座る身になっています。

裁判所では民事を担当していますが、例えば「家を貸したけれど借主が賃料を支払わないので、支払うよう判決をして欲しい」といった場合、背景の事実(賃料を支払わないのは雨漏りがしているのに貸主が直さない等)やそれに沿う証拠があるか、法律に照らして賃料を支払う義務があるかを判断し、事件を解決するのが仕事です。事実を探り、証拠や法律、判例の調査に万全を尽くし、どのような解決が最善かを考えます。訴訟は人の一生を左右することもあり間違った判断は許されませんが、職責は厳しいですが、分り易い裁判を目指し、やり甲斐を感じています。

一方、裁判官になるに当たっては、皆さんが想像されるように、裁判所って堅苦しいところだらけと構えていましたが、実際勤務してみると、職場の人と野球観戦(もちろんカープ!)や旅行をしたり、日頃の飲み会などアットホ



広島地方裁判所



伊吹 真理子さん

【1995年法学部卒業】

広島地方裁判所勤務・裁判官

ムな雰囲気です。普通の職場と言えるのではないのでしょうか。

また、一つの事件に対し、年齢も経験も違う先輩裁判官と同じ立場で議論を重ねていくことは、とても勉強になります。仕事を離れても、私生活をいかに有意義に過ごすかなど、先輩に学ぶことは多いですね。

高校や大学の友人とは、定期的に会っています。仕事の話になると、男性の友人で辞めたということあまり耳にしません。女性では銀行や証券会社に勤めて退職した人も多いです。結婚退職や上司の考え方に疑問を持ち、一日のほとんどの時間を仕事で終えたりすることに悩んで、結論を出したようです。でも、友人との話題の中心は、自分らしさであり、どんな仕事をしているかということもその一部ですが、如何に今自分に満足しているか、輝いているか、何を頑張っているかということです。友人の話を知ると、とても刺激になりますし、この関係は大事にしていきたいです。

最後に、私の大学生活は一年間茶道部に所属し、恋をしたり、先輩や友人と受験勉強をしながら過ぎていきました。悔いが残ると言えば、一般教養や外国語が単位を取るだけで終わってしまったことですね(苦笑)。



# 私と「仕事」

My Job, My Life

My Job  
My Life

志を高く持ち、自己実現  
を目指すことが、仕事を  
楽しくやれるポイントに  
なる！

「厳しい時代」「戦後最悪ともいわれる経済情勢を受けて、企業も社会も将来像の描けない難しい時代を迎えています。もちろん、就職を控えた学生の皆さんもその例外でないし推測いたします。私が就職した年も今日ほどではないにしろ、決して楽な時代ではなかったんです。銀行―冬の時代」といわれ、証券業界との垣根論争から、銀行業界全体に不透明感がただよっていました。したがって就職戦線も多難を極めたと言っています。幸い、私の場合は三和銀行に就職することができました。



入行以来十五年、大阪・東京の七本支店に勤務。現在は大阪市内の歌島橋支店で次長兼取引先課長として渉外業務の指揮をしています。お察しのよう、取引先まわりをしていると経済の実体を肌で感じられますから、今日の経済情勢の厳しさは身に痛いほど分かります。まして私が勤務する西淀川区は、重厚長大と呼ばれる鉄鋼関係の事業所がひしめく工業地帯であり、その不況感にはひとときかわ厳しいものがあります。しかし、不況の原因を銀行の「貸し渋り」に求めるマスコミの論調には、少し二面的に過ぎるような感じがあります。何よりも銀行は、将来に亘って、安定的にお客様に資金を供給する責務を負っていますから、私たちが自身も生き残らなければならないという切実な思いもあります。また安易な貸出を許さないとマーケットから株価や格付けによる制約を受けます。そういう意味では、銀行も経営余力があるから、上位行だからと安心していられる時代ではなくなっているのです。

お取引先に関しても、リストアップ計画が懸念として持ち上がるが増えています。ご相談にあずかる私たちが銀行員にしては、長い間かか

て築き上げられた事業や、人的財産を切り離す作業があり、経営者の方々と同じ痛みを感じます。ただ、リストアップや事業の縮小が後ろ向きだとは、一概には言えず、お取引先の経営意識を再構築するといった意味では十分に前向きな仕事としてとらえ、ご協力しています。

銀行員として十五年、最初の四、五年は本当に何も分りませんでした。三十を過ぎ、お取引先の社長や取締役と親しくさせていたたくようになって、企業は業種や経営規模ではないことがだんだん分かってきたような気がします。各社各様に魅力があって、おつき合いをさせていたがながら、こんな会社で働いてみたいと思ったことが幾度となくあります。その魅力は経営者の考え方であったり、企業そのものが醸し出すものなのでしょう。こういう刺激を受けられるということが、私が銀行員として最も魅力を感じる所です。

また個人的にも、銀行員という仕事を離れても少し人間関係を広げてみたいものです。仕事の中で生まれる人間関係に加え、地域貢献とかがないまでも、たとえば子供の野球チームのコーチをかって出るとか、仕事以外でも「人との接点をもっと増やして行きたい、今そんな心境になっています。



野口 雄二さん

【1983年商学部卒業】

三和銀行勤務・歌島橋支店次長兼取引先課長

# 企業と産業の 不可思議さ



高井 紳二

【商学部助教授】

一九五一年生まれ。同志社大学商学部卒業。早稲田大学大学院商学修士。三菱総合研究所経営開発室長、神戸大学経営学部助教授を経て、一九九七年より現職。最近の著書・論文は、D. Mowery 編、「The International Computer Software Industry」(Oxford Press、一九九六年)、JCI 編、「Made in Japan」(MIT Press、一九九七年)、加藤野・伊丹他編、「企業家精神と戦略」(有斐閣、一九九八年)など。

どうして企業は苦勞して儲けたり、損したりするのだろうか。企業を訪問するとあらゆる知恵を絞って、よい製品やサービスを作り出そうとしている。同じ苦勞をしても、いや他社に負けない苦勞をしても競争に勝てない企業があるし、業績のよい企業が常に最高の努力をしているとは思えない。例えば自動車業界をみると、自動車が売れるとそこに参画している企業がみんなよくなるかといえばそうではない。自動車を作るための鋼板を作っている鉄鋼メーカーの収益性はよくないが、各種の部品を作っている企業は現在まだある程度の利益が出ている。アッセンブリーメーカーは利益を出しているが、それほど大きなものではなく、量産のおかげで利益が出ている。売る方のディーラーはほとんどの企業が低収益である。ひとつの製品を作って売ることにおいても儲ける企業と儲けない企業が出てくる。どうしてこのようなことが起きるのか。

ひとつの産業構造においてこのような差が出てくることを明らかにするには、情報の非対象性、技術の模倣性、交渉力学、製品の革新能力、競争戦略、取り引きの経済学、消費者嗜好、企業意思決定過程といったことを知らなければ解答が出てこない。そしてこれらのことがある程度わかったとしても、実際の企業行動は理論的に行われるとは限らないし、今まで気がつかなかった新しい戦略を構築することもある。互いの内容を熟知していると相手の利益を取ろうとして、交渉に圧力をかけ、利益率を下げようとする。また関係が近ければ相手がどこで利益を上げようとしているかがわかるので、それが決定的な差でなければ自分で参入することもできるし、また自分のポジションが優位ならば一層の圧力をかけることができる。経済合理性でこのことがわかって、その通りに企業が行動することはあまりなく、常に革新的な行動が新たな収益源を作り出しているので研究する側も新しい方法を駆使して理論化することになる。経営学の研究は、企業行動と人間の不可思議な行動へのパズル解きの連続でたいへん面白い分野になっている。さあ皆で挑戦してみませんか。

# 「常二備へヨ」

私が卒業した神戸市東灘区内の小学校には「常二備へヨ」という文字が刻まれた記念碑があります。この記念碑は、1938年7月5日の阪神大水害で亡くなった児童の慰霊碑として、氾濫した近くの住吉川からもたらされた流石を使って建立され、突然襲ってくる災害への備えを怠るなという戒めを後世に伝えるものです。

1995年1月17日、この地は阪神・淡路大震災という激甚災害に再び見舞われました。当時東灘区住吉東町に居住していた私も、震度7の激震とその後の震災の体験者となりました。地震直後からの極めて困難な状況における体験は、私にさまざまな教訓を与えてくれました。そして私は「常二備へヨ」という言葉の真意を悟ったのです。

私たちは、「災害への備え」といえば、飲料水や食料、医薬品や燃料の備蓄、通信や輸送手段の確保などを思い浮かべます。確かに被災地では物資や情報の調達は困難を極めました。しかし震災の渦中にいた私は、それよりもはるかに大らかな備えがあることを痛感しました。

皆さんには「こんなことが起こるのならば、してあげれば良かった」と自らの行状を悔いた経験はありませんか？身内や知人、あるいは自分自身のケガや病気・死、家屋や物品の滅失や破損、物資の不足や枯渇など、私たちはさまざまな悲劇や災難に遭遇します。震災とは、地震にともなうこのような悲劇や災難が多数の人々の身上に同時多発的にふりかかったものだといえます。悲劇や災難に遭遇することは、それ自体、つらいことに違いありません。けれどもそのときに、自らのそれまでの人生を後悔することになれば、それはさらにつらく悲しいことです。

「毎日を精一杯有意義に生き、悔いのない人生を着実に積み重ねていけば、どんな事態に遭遇しようとも絶望することはない」――震災の体験を通して私は、「常二備へヨ」ということばが、単に災害に備えて物資や設備を常備しておくことだけではなく、私たちの常日頃の行いそのものを戒めるものであることを思い知らされたのです。

あの兵庫県南部地震から3年が経ちました。「禍三年時の用」の諺語に免じて拙文をお許しいただければと思います。



宮崎 耕

【経済学部助教授】

一九六四年神戸生まれ。神戸大学大学院経営学研究科経営学専攻博士課程前期課程修了。神戸大学教官を経て、一九九五年より同志社大学教員。専門は情報システム。本稿に関連する論文に、「激甚災害被災地における情報環境」、「インターネット時代における情報システム」(いずれもオフィス・オートメーション学会誌)がある。

お知らせ

# ANNOUNCEMENT

10月4日から今出川図書館を休日開館します

かねてから皆さんより要望がありました  
休日開館について、今出川図書館を本年10  
月4日から開館することになりました。

## 1. 休日開館の概要

秋学期の10月4日から開始します。  
開講期間と試験期間の日曜日のみ10時から17時まで  
開館します。  
開架閲覧室・参考図書室・雑誌室における閲覧のみの利  
用とします。  
返却図書はメインカウンターで受け取ります。  
書庫への入庫は不可とします。  
コピー機の使用は可能とします。

## 皆さんへのお願い

休日開館の概要は以上ですが、これ以外のサービスに  
ついては月曜日から土曜日までの該当時間帯にご利用く  
ださい。

なお、私語に気をつけ、携帯電話の電源を切って静か  
な雰囲気をご利用ください。

## 2. 利用資格

本学学生・教職員および学術情報センターの利用カード  
を持っているもの。  
EU資料センター利用者。  
紹介状による他大学関係者およびフランス・キング文  
庫利用者の入館はご遠慮ください。

## 1998年度開館日と開館時間

開館日	10月 4、11、18、25日	1月 10、17、24、31日
	11月 1、8、15、22、29日	2月 7、14日
	12月 6、13、20日	3月 休日開館日なし

開館時間 10:00~17:00

## 同志社大学派遣留学生の募集

1999年度~2000年度の外国協定大学への留学受付を、次  
の日程で行います。希望者は両校地国際課で手続きを行ってくだ  
さい。

なお、国際課窓口では「外国留学要項」を配布中です。

出願期間/98年10月6日(火)~10月12日(月)

問合せ先/国際センター国際課

今出川(075)251-3260

田辺(0774)65-7066

## 就職部からのお知らせ

就職部では、次年度就職活動を始める学生の皆さんのために、以  
下のような企画をすすめています。日程・時間の詳細は決定次第、就  
職部のホームページ、就職部・各学部掲示板などでお知らせします。

第1回 就職ガイダンス 工学部 田辺 10/31

文科系 今出川 10月下旬

就職システム説明会 今出川 10/30・11/5・9・13・19

田辺 11/6・10・18

SPI模擬試験講座 今出川 11/6 田辺 11/7

自己分析セミナー、女子学生セミナー、エントリー・シートの書き方  
11月中旬 複数回開催

その他マスコミ(10/16)・放送業界、国際機関等セミナーは、  
10月下旬以降に開催、また企業研究セミナーは次年度2月以降  
順次開催していく予定です。

企業環境の厳しさが増すなかで、就職活動のありかたも大きく  
変化しています。そこでは「質」の良い情報をどのように集めて  
利用することができるかがポイントとなります。ぜひ上記の説明  
会やセミナーに出席して活動に役立ててください。

## お便りをお待ちしています

『ONE PURPOSE』は、学生のみなさんと大学とのコミ  
ュニケーションをはかることを目的として発行していま  
す。本誌に関するご意見や企画のご提案、日頃学生生活を  
送っている中で気づいたことや疑問に思うこと、また悩ん  
でいることなど、ささいなことでも結構ですので、どしど  
し広報課までお寄せください。

## One PURPOSE

同志社大学通信116号

1998年10月1日(4・6・10・12月年4回)発行

発行 同志社大学 広報課

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入

TEL. 075-251-3120 FAX. 075-251-3080

E-mail ji-koho@mail.doshisha.ac.jp